

## 第6回新淡路地域ビジョン検討委員会 議事録

1 日 時 令和3年6月29日(火) 18:00~20:00

2 場 所 洲本総合庁舎3階会議室

3 出席者

委員：山本委員長、澤田副委員長、栄井委員、片平委員、堤委員、森委員  
横山委員、木下委員、東田委員、安居委員、原委員、木戸委員、堀内委員  
(13名)

県：亀井県民局長、吉野交流渦潮室長、木南ビジョン課長、刃物班長、福栄

4 内 容

(1) 県民局長挨拶

本日は第6回の検討委員会ということで、だんだんと最後を見据えて形をつくっていく段階に来ている。コロナの状況については、本日が25名、昨日が4名とだんだんと少なくなっている。淡路については5月23日以降、発生はゼロである。職域接種等もどんどん進んでいき、以前と比べて明るい光が見えてきている状況である。このまま良い方向に進めばと思っている。地域ビジョンについてもポストコロナということもあり希望の持てるビジョンにしていければと思っている。

(2) 地域デザイン案について (NPO 法人ソーシャルデザインセンター淡路より説明)

(質疑応答)

委員)

今までのビジョンづくりとの違いとして、危機に直面しているところから解を出すところと、淡路島の特殊性が今までと違う内容につながっていると説明があったが、淡路島の特殊事情というのは例えばどういったことがあるのか。

NPO)

一般論で言えば衰退しつつある農業地帯であるということだが、特に淡路島は伝統、文化を含めて地域性が高い。また、人と人、人と自然の良質な関わり方が飛び抜けているのが特徴的でそこを大事にするべき。これを生かしてビジョンをつくらなければいけないというのが要である。ときに絆はしがらみという側面もあるのでそこをどう上手にさじ加減をするかが難しいと思っている。

委員)

個人の価値観の見直しを大きな項目に掲げているが、具体的に価値観を見直すことは非常に難しいと思うが、価値観の見直しに繋がる方策があれば教えて欲しい

NPO)

人がそれを変えるのは、変えざるを得ない状況に追い込まれるか、変えたいという欲求に従うか、社会的な圧力で変えるかの3つである。それらを上手に組み合わせて変えていく。1つは強制的にならないように上手に経済政策に入れること。

NPO)

多様な生き方を目標として掲げているが、当NPOでは引きこもりや不登校の相談など社会的弱者の仕事づくりに関わっている。社会の中で自分はダメだと思って自殺をしたくなるような子がきている。大抵の場合は社会のルールにその子たちが合っていない。引きこもりになった子は家で早く一人前になれと言われていて。一人前の価値観とは誰が決めたのか。統合失調症の人が週に3日働きに来ているが、家族からは一人前じゃないと言われる。私たちからすれば一人前の立派な社会人だと思う。今までの社会はそういう価値観に縛られながらあったのかなと思う。学校へ行かなければ社会からはじかれたような評価がされてしまう。そうした価値観を変えていく仕組みを作っていくことが個人の価値観を大切にすることに繋がると思う。

### (3) 淡路新地域ビジョン骨子案について

(発言要旨)

委員)

教育に関する内容が少ないと思う。教育の質ということではなく、地域ができる教育、子供たちとの関わりを具体的に。昔は地域の大人が子供たちを叱ったりして教育していた。昔のいいところを残せば。

鬱や引きこもりになる若者が増えているのは家庭内の問題もあると思うが、それを地域でサポートできるような記載があれば。

委員)

観光は特に第1次産業と連携して淡路に来てもらったり、淡路の良さを発信したりすることで淡路の経済を高めていく役割がある。

目標の小項目の1つに観光が入っているが、もっと「御食国」、「食の島」、「観光の島」ということを前面に出してほしい。そうすることで、淡路全体で観光客をもてなして淡路を盛り上げられれば。

委員)

各目標に「大切にする島」という言葉で表現しているが、「生かす島」という表現にすることですべてに関わってくるのではないか。生かすことで経済の循環にもつながる。

多様性の部分では、一人一人の個性を「理解」ということが大事なのでは。移住者も地元の人でも理解することが必要。これから淡路島でいろんな方が関

わっていくうえでまず理解をし合う。そこからつながりがはじまる。理解をする場が少ないので理解をテーマにするとそういうコミュニティの場や話し合う場ができたりするのかなと思う。

委員)

目標2に地域コミュニティにつながることを書かれている。それはそれで大事だが、コミュニティ（共助）からはみ出した人をどう救うのか、どう公で救えるかというセーフティネットもあってほしい。理解しあうことに近いかもしれないが、理解できなくても認め合うことが必要。

多様性の部分で、学校に行けない子供、行かないことを選んだ子供をどう取り込むかということも必要。

委員)

教育と仕事は離れているイメージがあった。SODAからも話があったが、学校に行けなくなった子をどうするかというときに、働くことから学ぶことがある。発達障害の方がカフェで働きながら社会に適用するだとか学校へ行かなくても働くことを通じて学べたり選べたりすることが必要。

個の特性に合わせて誰かの役に立って賃金を得られるようなことを企業も行政もつくれたらいい。

委員)

移住相談でも島外の人の方が淡路の自然の良さを知っている。島内の人はずれを忘れていて。自分たちが小さいときは自然の中で遊んでいたけど今の子供達はそうではない。子供たちに学校や地域の中で伝えていかないと30年後に自然が素晴らしいことに気づく人が少なくなるのでは。島外の人を呼んで体験してもらったり、地元の子供や次の担い手となる人たちにも広げていく必要がある。

委員)

自然、資源を生かすということにつながる部分であると思うが、キーワードとして「環境教育」をビジョンに入れることが必要。

委員)

項目のタイトルを「みんなが理解できる島」とか「誇りに思える島」という書き方がいいのでは。こういう風にしていきたいというのがあればいい。

委員)

目標1(2)で脱炭素について書かれていないのは不思議。淡路島が脱炭素を先導してやっていくくらいの思いで書いてもいいのかなと。脱炭素に取りくむことで企業誘致にもつながる。

教育についても記載が少ないのでもう少し踏み込んでもいいのかなと思う。

地域のつながりという部分では南あわじ市が実施しているアフタースクール事業が広がっていけばいい。市単位では小中のつながりになるが、県として島

内で中高一貫というつながりの視点も意識すれば面白いのでは。課題の中で下水道普及率が県全体よりも低いこと触れているが、下水道が敷設されると後にいらぬ負債を残してしまうので課題という認識ではない。むしろ処理率を高めるほうが大切。医療面では、産科、小児科医の確保をしっかりとしないと安心して子供を産んで育てられる島にならない。少子高齢化の要因に子育て環境や娯楽の不足とあるが、仕事がないことの方が大きな要因であると思う。有効求人倍率が高くても仕事のマッチングが合っていないところがある。そこをどうするか。ワーケーションなどで改善されると淡路島で仕事ができる環境が整ってくる。流域治水については、農業の後継者不足から水路の維持管理が受益者負担で地元の田主や町内での管理となり非常に痛んでいる。そこに手を入れておかないと周辺の住民にも影響が及ぶ。

委員)

福祉分野の課題として人口減少高齢化が進む中で、一人暮らしの高齢者の増加や身寄りのいない人や老老介護などある。その中でも認知症の問題は欠かせない課題である。寿命が延びるほど認知症も増える。認知症というフレーズに触れられていないので、つながりの部分で認知症を理解したり、認知症になっても共に暮らせるというフレーズを書き込むべきでは。支える側の担い手である「家族の会」が洲本市で1つ無くなった。後継者不足という部分も大きい。事業者だけでなく地域の中でつながりを大事にして支えていけるようなことが必要。

委員)

これから高齢者が増えるが、どう高齢者の役割を發揮してもらえるか。農業や漁業に従事してきた人が多いので、その人にしか持っていないスキルを伝えるなど、これから高齢者の役割が大きくなっていく。

委員)

人生100年時代の中で第2、第3の役割を持つことが重要。高齢者がやれることはたくさんある。体力的な問題もあり、どこまでできるかということはあるが、生涯活躍についての記載もあればいい。

課題の部分が目標につながっていくようにもう少し書き込んだ方がいいのでは。

委員)

環境の課題で山林の荒廃に加えて農地生態系の荒廃も明記して欲しい。農地生態系は淡路島の自然環境の生物多様性を支えている。景観風景の質では、緑被率、緑視率よりも自然、文化、歴史的背景を踏まえたまちづくりや景観保全という言葉があった方がいい。

脱炭素に関わる部分で、淡路島で作られている太陽光発電に関しては自然環境とトレードオフになっている部分がある。脱炭素をしながらも地域の自然環境の保全と調和させるということを入れておいたほうがいい。

流域治水を実現するためには、淡路島では水田、ため池、水路が重要となってくる。そのときに治水の視点だけだと水路は立派になるが自然環境が損なわれる危険性があるので、流域治水と合わせてグリーンインフラの活用ということを記載してほしい。

委員)

地元の集落では農家の人が減り水利組合の統合の動きがある。池を閉じていく作業がでてきている。環境問題というよりは責任の問題。災害時に水利組合の総代が賠償の対象者となるなどの課題があるので地域でどこを生かしてどこを自然に残すかをここ3年～5年の中で話している。サイクルをどうつくるか。人と教育からはじめていくべきと考えている。そこが産業に循環されて、産業で余裕ができた財源を弱いところに持って行くというサイクルが正しいと思っている。そこに自然との調和の仕組みがあると思う。

課題の記載が少ないと思う。

何か1つ中心になる強いものを掲げるべき。観光、食、人という部分に力を入れているというメッセージが伝わるような書き方をしたい。

委員)

食いつばぐれのないということは誰も置き去りにしないということであり、置き去りにされた人を積極的に救い出していくコーディネーターの役割が必要になってくる。

第7章の役割については少し絞ってわかりやすくすればどうか。

委員)

方向性として人間としての道徳的なビジョンとするのか淡路島らしいビジョンとするのかが混在しそう。淡路島らしさという独自性を盛り込むべき。

委員)

昨年度、他地域のビジョン委員との会に参加した。その中で淡路の特徴として食は大きいと感じた。それから自然、山と海が近いということ。

委員)

スローガンの精査と課題の部分をもう少し整理すべき。

委員)

何か始めようとしたときに、浄化槽の問題など知らない課題が出てくる。山も農地も含めて買って欲しいと言われたときに農家じゃないので買えないという問題もあった。耕作放棄地を何とかしようとして草刈りをしている。祭りや伝統文化など芸術関係の記載が少ないように思う。

多様性の部分でA Iや5 Gに触れているが、電磁波を避けたいがために淡路

に来ている人もいる。そういう人にも選択できる地域になって欲しい。その部分でも多様性を認められる島になって欲しい。在宅医療や在宅出産をかなえられるような島にもなって欲しい。

委員)

一次産業と観光業は淡路が胸を張れる産業。その2つの産業を踏まえて、夢のある明るいスローガンを掲げたい。

委員)

「食いっぱぐれない」とは暮らしやすいとか生きやすいことだと思う。いろいろなタイプの人が認め合って生きていけるというのも生きやすさということだと思う。「食いっぱぐれ」に変わる言葉として「気楽に生きられる島」というのはどうか。

委員)

「食」を主軸に学んだり考えたりケアしたり、いろいろな人に関わるスローガンになればいい。

委員) 自然環境だけでなく人の社会環境であったり再生可能エネルギーを創出することで自然環境に対する負荷が減るなど、結果として農業や観光活かせる場所に繋がってくる。